中部総会の大学院企画を振り返って

神戸大学大学院　医学研究科　腎泌尿器科
日本泌尿器科学会　ダイバーシティ推進委員会
佐藤　克哉

第 74 回日本泌尿器科学会中部総会におけるダイバーシティ推進委員会企画「令和の大学院生にクローズアップ！」では、令和における大学院生をテーマに活発な議論が行われました。本企画の背景には、大学院へ進学する医師数の減少があり、その要因として初期臨床研修の義務化や、若手医師の臨床志向の高まりが挙げられます。大学院進学者の減少は、泌尿器科領域の研究力低下につながる重大な問題です。その中で、令和の大学院生たちは研究・臨床・家庭の各方面で奮闘し、多くの課題に直面し続けています。本企画は、大学院生が抱える様々な課題にスポットライトを当て、考えることを目的として開催いたしました。

まず、座長の木村友和先生（名古屋大学）と福田理恵先生（金沢大学）の進行のもと、各パネリストによる自己紹介を行いました。パネリストの軸屋良介先生（横浜市立大学）、宮地志穂里先生（三重大学）、佐藤克哉（神戸大学）がそれぞれ大学院生活の実情を語り、自身の研究内容や、大学院生活の良かった点・辛かった点について率直に発表しました。研究での挫折の経験や、それを乗り越えて新しい発見をしたときの喜び、また臨床を数年間離れてしまうことの葛藤についてのお話が印象的でした。

続くディスカッションでは、泌尿器科医が研究をすることの意義、大学院生に吹く逆風、令和の大学院に求められるものという 3 つのテーマについて議論を行いました。「何のために博士号の取得を目指すのか」という問いに対しては、「大学で仕事をしたいから」というわかりやすい意見が出た一方で、「はっきりした答えはまだ見つかってないけれど、大学院生活で得た経験は思考の幅を広げ、きっと今後の泌尿器科人生の役にたつと思う」と考えている参加者もいました。研究・臨床・家庭とのバランスについては、家事のアウトソーシングを行うなど、時間が限られる中での工夫が語られていましたが、やはりみなさん苦労しているようでした。さらには働き方改革や研究活動への報酬といったまさに令和の課題についても話し合い、研究活動がしっかりと評価されるような業界になってほしいとの意見が出ました。会場からも多くの質問や意見が寄せられ、議論をさらに深める貴重な場となりました。

本企画の中で、大学院生の置かれた現状や課題について具体的な解決策を導き出すには至りませんでしたが、令和という新たな時代における大学院の在り方を考えるきっかけを提供できたと考えています。また、泌尿器科領域の研究の「裾野」を広げるためには、引き続き大学院生やその指導医、さらには将来の大学院生である若い先生たちへ向けた議論を深めていくことが必要と考えています。

最後に、大会運営にご尽力いただいた溝上教授をはじめ金沢大学泌尿器科の皆さま、本企画運営にご協力いただいた座長・パネリスト・ダイバーシティ推進委員会の皆さま、そして本企画にご参加いただいた全ての皆様に深く感謝申し上げます。

添付写真：左から木村先生(名古屋大学)、佐藤(神戸大学)、宮地先生（三重大学）、軸屋先生（横浜市立大学）、福田先生（金沢大学）